

入の問題がある。これは直接には所在情報と結びつくが、一面で主題的アプローチを含め文献情報検索機能の方へも接近し、また目録作成という業務機械化を通じて省力化標準化が推進されることになり、学内ネットワーク形成への一段階ともなる。これはまた、近い将来に現実化するであろう国レベルの学術情報システム稼働への学内的シミュレーションにもなり、ひいては全国システムへの京都大学全体のドッキングが期待される。この波及効果として受入業務から閲覧貸出まで機械化システムの展開が可能になり、選書・発注の段階からチェックできるので全学の収書方針や重複の調整、ひいては蔵書構成を計画化することが可能になる。このことはさらに資料配置の合理化、共同利用の便宜性や保存書庫計画とも結びつく。もう一つ、利用面の機械処理は図書館統計の全学的集約と分析をもたらし、これをフィードバックすることによって図書館の奉仕と運営に反映させることもできる。もっとも拡大して言えば図書館体系や集中・分散の問題の有力なデータを提供することも考えられる。

これは少々先走った薔薇色の未来像ではあるが、純技術的に見れば現実性のあることばかりである。もっとも本学として今後どう対応して行く

べきかは政策的なことであり、商議会や全学レベルの方針決定にまたなければならないが、欧米の現状からみて大きな流から背を向けることはできないと思われる。また仮に技術的に可能でも、これを実現にもって行くためには、種々の困難な条件が輻輳しており、目標への過程において問題山積し容易に打開できないであろうとは目に見えている。しかし敢えて情報システムをクローズアップしたのは、これが本学の置かれている状況を展開する突破口になるのではないかと考えたからである。

あるべき図書館像はあくまで高く掲げなければならないが、これを達成するためには地道な日常活動の積み重ねが要求されるのであり、本学のもつ伝統と地域性を踏まえての登高の意志が最後にものをいうであろう。図書館に課せられた知的媒介機能が図書館の最大の存在理由であり、大学の創造的営為への生きた道具である以上、図書館が一つの起爆剤になることがわれわれの理想となるであろう。そしてこれは個々の図書館にとどまらず、国レベルの学術情報システム自体が、一つの壮大な絡繰りの完成であると見るのはあながち白日夢ではあるまい。

附属図書館利用調査の集計結果について

この調査は図書館の利用者に対しアンケート形式により利用実態全般について行ったものである。このような調査は昭和32年以来行われておらず、大分以前から懸案事項の一つとされていたが、たまたま昨年の秋、(全学)閲覧系掛長会議の協力も得て案が固まったので、11月の読書週間の行事の一つということで実施の運びとなったものである。

何分質問事項が多岐にわたり、また細かい点の集計で未完の部分もあるので、ここでは主要な事項についてのみ報告する。

1. 調査日時 昭和54年11月14日(水) 9:00～

21:00

2. 調査方法 入館時に調査票を配布し、退館時に受取った。なお2度以上にわたる入館者には配布しなかった。

3. 集計結果

この調査の日は、4回生は既に就職が定まり、11月祭の準備もあり、加えて本年初の寒波襲来とあって、最低気温1.9°年平均6°(京都新聞発表)で、予想していた入館者数をはるかに下廻った。反面、回収率82.5%と言う質の高い利用者の声として集計出来た。

(A) 時間別入館状況および回収率

入館時 区分		9時	10時	11時	12時	13時	14時	15時	16時	17時	18時	19時	20時	21時	計	備考
アンケート配布枚数		114	105	99	107	100	111	72	91	(66) 40 23 3 0					865	
回収枚数		92	94	80	85	85	83	61	74	60					714	
回収率		80.7	89.5	80.0	79.4	85.0	74.7	84.7	81.3	90.9					82.5%	
性別	男	84	86	76	78	81	74	56	69	56					660	91.9%
	女	8	8	4	7	4	9	5	5	4					54	8.1%

(B) 利用者の身分

利用者の約76%が学生であることは、附属図書館の性格から十分うかがえる。

学部別の利用については、法学部、文学部学生の利用が圧倒的に多いが、工学部学生の利用が19%であることや、教養部学生の利用が全利用者の1/3を占めているのも注目すべき点である。また教育学部学生の利用が多いのは、教育学部図書館が工事中のためである。

利用者の身分等

入館時 身分別	9～12時	12～17時	17～21時	計	%
教 官	4人	4人	0人	8人	1.1
事 務 職	4	4	2	10	1.4
院 生	26	33	2	61	8.5
学 生	199	290	53	542	75.9
学 外 者	15	6	0	21	2.7
無 回 答	18	51	3	72	10.0
計	266	388	60	714	100

回生別		教 養 部		専 門 課 程			計	%	募集定員	在学生数	利用者数 在学生数
学部別	1 回生	2 回生	3 回生	4 回生	5 回生 以 上						
法 学 部	4	36	49	34	31	154	28.4	330	1,707	9.0	
文 学 部	22	22	36	30	11	121	22.3	200	1,006	12.0	
経 済 学 部	2	10	8	16	2	38	7.0	200	852	4.4	
教 育 学 部	3	12	3	6	1	25	4.6	50	219	11.4	
理 学 部	13	7	16	20	5	61	11.2	281	1,299	4.6	
工 学 部	14	24	47	13	5	103	19.0	945	3,954	2.6	
農 学 部	5	8	5	3	1	22	4.0	300	1,239	1.7	
医 学 部	1	3	1	6	3	14	2.5	120	752	1.8	
薬 学 部	0	2	2	0	0	4	1.0	80	322	1.2	
計	64	124	167	128	59	542	100	2,506	11,350	4.8	
	11.8	22.8	30.8	23.6	10.8	100%	院生，聴講生を除く				
	34.6		65.2								

(C) 利用者の読書環境

住居の種類のうち下宿（生活者）の利用は67.3%と全体の%を占めている。さらに17時以後の利用をみると自宅10人、下宿47人と下宿の方が圧倒的に多くなっている。

住居における読書環境は住宅事情の向上により「適当」「ほぼ適当」の合計は71%となってお

り、前回調査と比べると7%近く増えているが、17時以後の利用もかなり多く、不適当組と比べてそれほど差はない。いずれにしても本館の閲覧室が常に満席状態になっているのは、閲覧室全体にみなぎる厳粛かつ熱心な雰囲気引寄せられることと、座席数の絶対的不足との双方によるものと

思われる。

利用者の読書環境

時間 区分		9～17時 人	17～21時 人	計 人	%
住居の種類	自宅	167	10	177	24.7
	下宿	434	47	481	67.3
	無回答	53	3	56	8.0
計		654	60	714	100
読書環境 住居における	適当	172	11	183	25.6
	ほぼ適当	295	29	324	45.3
	やや不適当	108	14	122	17.0
	不適当	27	4	31	4.3
	無回答	52	2	54	7.5

(D) 利用回数と利用時間

毎日来る、週4,5回来るの両方を合わせると、約8割となり、回答者の殆んどが毎日来る固定客

のようである。カウンターから見ていると、毎日同じ人が長時間利用しているように見えるが、本集計によると1・2時間の利用者が最も多くなっている。

利用回数と利用時間

時間 区分		9～12時 人	12～17時 人	17～21時 人	計 人	%
図書館の利用回数	毎日	72	70	16	158	22.1
	*毎週	160	213	35	408	57.1
	*毎月	17	39	4	60	8.4
	めったにない	3	19	2	24	3.3
	無回答	14	47	3	64	8.9
計		266	388	60	714	100

* 毎週及び毎月は2回以上の利用も含む

入館時 区分		9時	10時	11時	12時	13時	14時	15時	16時	17時	18時	19時	20時	21時 計	%
利用時間	1時間以内	13	20	15	19	25	30	28	31		18			199	27.8
	2 "	9	13	14	12	14	9	13	18		10			112	15.6
	3 "	9	11	5	12	4	10	9	10		8			78	10.9
	4 "	7	2	5	3	0	8	2	5		5			37	5.1
	5 "	5	2	4	4	1	6	1	3		0			26	3.6
	6 "	1	14	5	4	2	1	2	0		0			29	4.0
	6時用以上	21	0	7	6	6	6	0	0		0			46	6.4
	無回答	27	32	25	25	33	13	6	7		19			187	26.1
計		92	94	80	85	85	83	61	74		60			714	100

(E) 多く利用する資料

開架図書を最もよく使うという利用者は47.8%であるが、無回答者は資料を利用しない自習者とみなせば、資料利用者全体の61%が開架図書を最も多く利用していることになる。

開架図書と書庫内の図書の利用を比較してみると、この表では7対1位とかなりの差があるが、53年度の利用統計では開架図書の利用者が、33,545人書庫の図書の利用者は13,131人であり、3対1位の割合となっている。したがってこの表はあくまで利用順位が1位という観点からのもので、実際の利用度の数を示したものとは若干異なることを留意する必要がある。

多く利用する資料

種 類	利 用 順 位 1位の回答数	%
図書(開架)	342	47.8
図書(書庫)	51	7.1
雑 誌	28	3.9
新 聞	68	9.5
辞書・事典	33	4.6
書誌目録	37	5.1
そ の 他	1	0.1
無 回 答	154	21.5
計	714	100

注：指定図書は図書(開架)に含めた

(F) 利用者の希望事項

図書館に対する要求・希望事項の欄はa施設・設備、bサービス、cその他の三つに分けたが、回答の大部分は施設・設備に集中した。

施設・設備に対する要求としては、閲覧スペースの不足、机、椅子の改善、照明不十分、冷暖房の完備等があげられ、サービス面では開館時間の

延長を希望するのが最も多く、また、その他では、工事の騒音に対する不満が目についた。なおサービス面では昨年開架図書の貸出や開館時間の延長が実施されたことを反映してか、サービスの現状に対する満足、あるいは今後のより充実したサービスに対する励ましの意見がかなり多かったことを付言しておく。

— 図書室めぐり —

文 学 部 図 書 室

文学部は哲学科、史学科、文学部の三学科制のもとに現在40講座で構成されている。学生:1,387名、教官(非常勤講師を省く):88名、図書系職員(整理掛、閲覧掛):23名である。

図書施設としては、整理室と哲学科、史学科、文学部の三閲覧室、三書庫を持っており、本学教官及び文学部学生は書庫に入って自由に図書を検索することが出来る。書庫の中の図書は教室別にそれぞれ独自の分類表にしたがって配架されている。(同一系統の講座をまとめて教室と称しているが現在26教室である。)また三閲覧室には共同利用の参考図書を備えている。その他心理学、考古学研究室、古文書室及び羽田記念館にも各々所属図書資料を保管している。目録カードは文学部総合目録(著者名、書名)と、昭和26年以降編成のNDCによる分類目録を備えている。

歴史を顧みると、明治39年(1906年)9月文科大学が開設された時に初代附属図書館長、島文治郎助教授がその以前から蒐集して準備されていた図書を研究室に備えて学生に自由に利用する便宜を与えたことが本学部図書室の起源となっている。その後大正3年から同14年にかけて史学科、哲学科、文学部の順に書庫・閲覧室がつけられた。そしてその間、大正8年には大学令改正で文学部となり大正12年には従来の図書利用に関する研究室規則が改められてはじめて図書室規則ならびに細則が制定されて学部図書室制度の基盤がつけられたのである。



図書が文学部にとって最も重要な研究資料であることは今更云うまでもなく、そのために本学部では予算を出来るだけ図書費にまわして蔵書構成の充実を力をしてきたのであるが、創設以来70年余の今日蔵書冊数は60万冊近くになっている。その大部分は日本の学界のみならず世界的に輝しい業績をのこされた歴代の教官の努力によって蒐集された研究資料で稀覯書も多い。また教官個人の愛蔵書であった貴重なコレクションも数多く収蔵されている。図書室では昭和25年度以降受入た図書については増加図書月報及び特殊文庫冊子目録を作成している。本学部では取扱う資料にはあらゆる言語の文献が含まれているので職員は語学的、書誌学的知識をもつ必要があり、また学部の体系に応じて非常に精密なライブラリー・サービスをつとめなければならない。

昭和53年度の利用統計を調べると年間利用者数